

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社八束野塚基盤新設工事に伴う

野塚遺跡発掘調査報告書

平成 23 年 3 月

松 江 市 教 育 委 員 会

財団法人松江市教育文化振興事業団

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社八束野塚基盤新設工事に伴う
野塚遺跡発掘調査報告書

例 言

1. 本書は、平成22年度に委託を受けた、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社八束野塚基盤新設工事に伴う野塚遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社から松江市教育委員会が委託を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在は以下の通りである。

野塚遺跡 島根県松江市八束町江島133、

4. 現地調査の期間

平成22年4月13日～平成22年4月19日

5. 開発面積・調査面積
開発面積 108 m²
調査面積 70 m²

6. 調査組織

依頼者 株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社

主体者 松江市教育委員会

事務局	松江市教育委員会	教育長	福島 律子
"	文化財課	課長	錦織 康樹
"	" 調査係	係長	赤澤 秀則
"	" "	主任	後藤 哲男（事務担当者）

実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団	理事長	松浦 正敬
-----	------------------	-----	-------

"	埋蔵文化財課	課長	大西 誠
---	--------	----	------

"	" 調査係	係長	中尾 秀信（調査担当者）
---	-------	----	--------------

"	" "	専門企画員	門脇 誠也（事務担当者）
---	-----	-------	--------------

"	" "	調査補助員	渡邊 真二
---	-----	-------	-------

7. 調査に携わった発掘作業員

吉田 義、福田 進、松本長子、小川真由美

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書に携わった遺物整理員

坂本玲子、中谷美枝子

9. 本書に掲載した遺物実測図および遺物写真は渡邊真二が行った。

10. 本書の執筆・編集は、松江市教育委員会文化財課の協力を得て、中尾秀信が行った。

12. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。

13. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 位置と歴史的環境	2
3. 調査の概要	4
4.まとめ	8



1. 調査に至る経過

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社によって通信エリアの拡大及び品質向上を目的として、松江市八束町江島に無線基地局設置が計画された。この計画は敷地108 m²の内、約60 m²に無線基地局を建設するもので、平成19年1月25日、計画予定地について埋蔵文化財の有無を確認するため分布調査依頼書が松江市教育委員会へ提出された。

試掘調査の結果、土壌や溝を検出し、試みに半掘した土壌は住居の柱穴と考えられ、古墳時代の土師器片が出土した。また、周辺の畠にも土師器、須恵器の散布が認められ、遺跡は調査地外にも広がっているものと推測された。遺跡名は字から野塚遺跡と命名し、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社に回答を行った。

平成19年2月24日、土地所有者から遺跡発見の届出が提出され、同年3月26日、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社から埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、島根県教育委員会から工事着手前に発掘調査を実施することの指示が出された。

その後、工事計画は基地局建設から鉄塔のみを建設することに計画変更され調査面積が大幅に縮小され、松江市教育委員会の直営で平成19年7月2日に鉄塔部分である2×2m(=4 m²)の発掘調査を実施することになった。調査終了後、島根県教育委員会と遺跡の取扱いの協議を行い鉄塔は建設されることになった。

その後、平成22年になり株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社によって、既存鉄塔横に基地局建設が再度計画されることになり、平成22年3月1日、埋蔵文化財発掘

調査の届出が提出された。島根県教員委員会から工事着手前に発掘調査を実施することの指示が出され、平成22年4月に約70 m²の発掘調査を財団法人松江市教育文化振興事業団により実施した。期間は平成22年4月13日～同年4月19日までの5日間であった。



2. 位置と歴史的環境認識

野塚遺跡は松江市八東町江島字野塚133に所在する。

八東町は山陰の中央部、中海に浮かぶ大根島と江島から成る。北は松江市美保関町、東は鳥取県境港市と接し、古く出雲国風土記(733)には大根島を○○(タコ)島、江島を鰐蛇(ムカデ)島と記載されている。

大根島は火山島であり、今から約10万年前の噴火で噴出した熔岩は、玄武岩質で柔らかく流動的であったので、今日のような緩やかな斜面の台地形の島となつた。

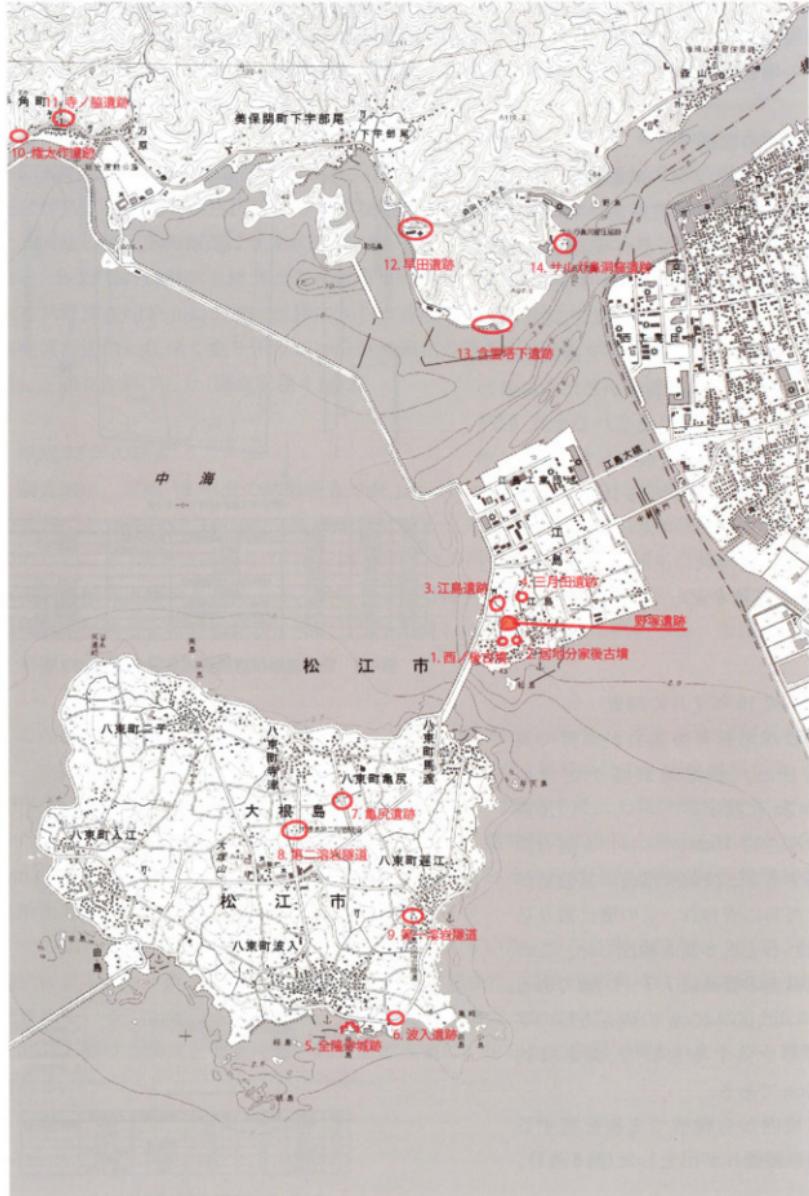
大根島の面積は5.26平方キロメートル、江島は1.16平方キロメートルあるが、一度海面下に沈んでいた時期があり、この時に堆積した大根島層と呼ばれる火山灰質の肥沃な腐植土で全島が覆われていて、現在では薬用人参や牡丹などの栽培が行われているが、周辺の遺跡の分布状況からみると、古く縄文時代から人々が生活を営んでいたことが知られるのである。

この付近にある縄文時代の遺跡としては、松江市美保関町森山のサルガ鼻洞窟遺跡(国史跡)が知られるが、ここ江島でも縄文式土器が採集されたとの報告があり、江島遺跡と呼称されている。そのほか対岸の海岸沿いには権太作遺跡・寺ノ脇遺跡・早田遺跡・含盡塔下遺跡などが点在する。弥生時代には、大根島の二か所で磨製石斧が発見され、それぞれ亀尻遺跡、波入遺跡と呼ばれている。

古墳時代は、西ノ後古墳、居地分家(おろちのぶんけ)後古墳という二つの古墳が周知の遺跡として知られており、また島根大学が調査を行った三月田遺跡では、土馬の破片等が出土している。

野塚遺跡	土師器・須恵器	古墳時代
1 西ノ後古墳	石室	古墳時代
2 居地分家後古墳	石室	古墳時代
3 江島遺跡	縄文式土器	縄文時代
4 三月田遺跡	土師器・須恵器・土馬	古墳時代
5 波入遺跡	磨製石斧	弥生時代
6 金庭守城跡	尼子・毛利	戦国時代
7 鼻尻遺跡	磨製石斧	弥生時代
8 第二津井廻道	特別天然記念物	
9 第一浴谷廻道	特別天然記念物	
10 権太作遺跡	磨削縄文土器	縄文時代
11 寺ノ脇遺跡	条文・爪形文	縄文時代
12 早田遺跡	爪形文土器	縄文時代
13 含盡塔下遺跡	爪形文土器	縄文時代
14 サルガ鼻洞窟遺跡	縄文式土器	縄文時代





尼子・毛利の時代には、この地を治めた小川氏の居城として全隆寺城が築かれている。全隆寺開基・小川右衛門頃は安来市広瀬町富田城主・尼子氏の家臣で大根島城主としてこの地を治めたとの碑文が今も残っている。江戸時代末期には石高 1434 石余りであった。

3. 調査の概要

・平成 19 年 2 月の試掘調査

この地に携帯電話基地局の鉄塔建設が計画されたことから、松江市教育委員会が基地局予定地の中央に $3 \times 2\text{m}$ の大きさにトレーニングを設定した。地表の厚さ約 15cm のクロボク層を除去すると、灰褐色の基盤層がただちに表われ、この層に掘り込まれる土坑 9 (P1 ~ 9) と溝 (SD01) を検出した。試みに半掘した P9 では深さ約 15cm で、住居の柱穴であろうと考えられる。この穴からは古墳時代の土器片が出土した（調査面積 6 m²）。

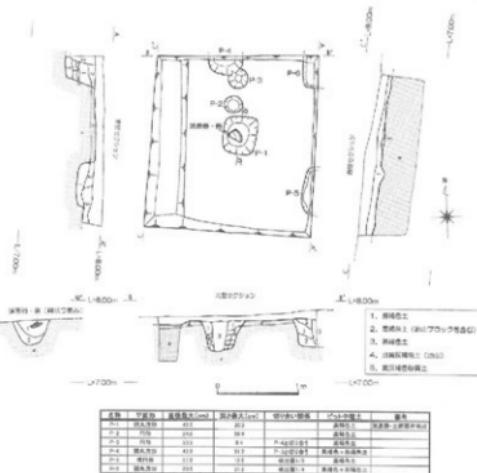


第4図 野塚遺跡試掘調査成果図(平成19年2月)

・平成 19 年 7 月の調査

松江市教育委員会が直営で実施した。基地局鉄塔予定地に $2 \times 2\text{m}$ に設定したトレーニング。地表の厚さ約 15cm のクロボク層を除去すると、淡黄灰褐色の基盤層がただちに表われ、この層に掘り込まれる土坑 6 個を検出した。この遺構面の標高は 7.7~7.8m である。P-1 は、 $50 \times 40\text{cm}$ の隅丸方形の平面形を呈する土坑で、深さは約 30cm である。

坑内から輪状つまみを有する須恵器蓋片が出土した（第6図1）。



第5図 野塚遺跡調査成果図(平成19年7月)

この遺物は 8 世紀代のもので、これらの土坑は奈良時代の建物の柱穴と考えられる。調査区端で検出した同様の土坑 P-4、P-6 では、坑内には明瞭な柱痕跡と柱建立時の版築状につき固めた土層が観察でき、柱の太さが確認できる P-4 では、径約 20cm のものが使われている。P-4、P-6 は隅丸方形の平面形を呈すること、ほぼ東西に並び、柱の根方をつき固めていることなどから、小規模ながら何らかの公的な施設あるいは豪族居館である可能性も考えられた。両柱の芯々間の距離は 1.2m であった。P-5 はやや浅く、性格が異なるものと考えられる。P-2、P-3 は柱穴とは考えられるがやや浅く、簡素な建物が想定される。なお、隣接する試掘調査時のトレーナーでは柱穴からは古墳時代の土師器片も出土している。また、調査区両辺沿いに深く掘り下げて、淡黄灰褐色の基盤層以下には包含層はないことを確認し、調査を終了した（調査面積 4 m²）。



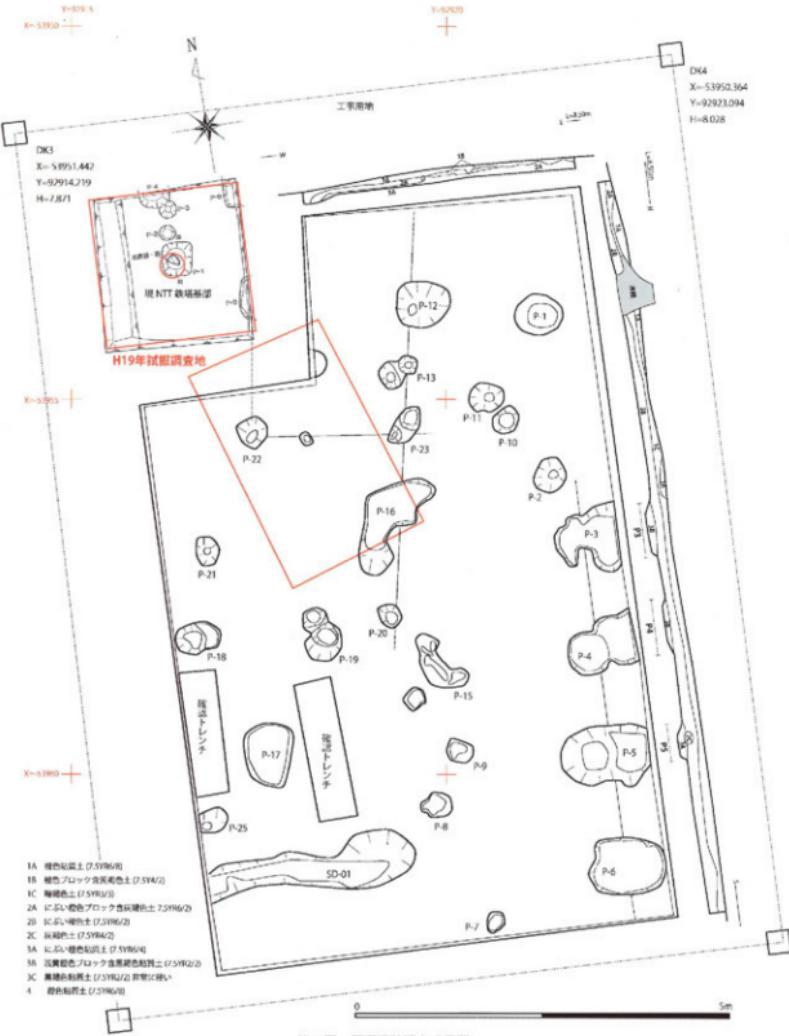
第 6 図 野塚遺跡出土遺物実測図

・平成 22 年の調査

調査地は、平成 19 年度の試掘調査で表土下 15 cm 前後で、すぐに遺構面に到達するとの報告であったので、当初から、調査地全域を人力により精査しながら遺構面の確認に努めたところ、現表土面から 10 cm～15 cm の厚さの所謂大根島層と呼ばれる黒褐色の火山灰土状の軟質土層をとり除くと、褐色を呈する硬い遺構面を検出した。しかし、この遺構面も雨が降ると軟質の泥状に変化し、少し乾いてくると途端に硬化する、所謂火山灰土特有の土質である。

この遺構面には、大小 30 個近くの円形のピットを検出したので、これらすべてを半堀し、内部の土砂の堆積状況を調査した。最も大きいものは東西幅約 1m、南北幅約 0.7m の楕円状のピットで、南北に 0.7～0.9m 間隔で南北に列を成すピット群が検出され、ピット内からは土製支脚や須恵器片が検出されたので、建物跡のようにも考えられたが、平面形は歪で底は丸くなっている、黒褐色土が確認されるのみで柱穴と思われる堆積状況は断面で観察できなかった。

その他のピットは、正方形や長方形に配置されているような状態ではなかったが、直線上に並ぶピット群を 2 か所で確認することができた。また南西角では溝状の遺構も検出されている。土地の人の話では、元来ここは桑畠だったとのことだが、これら列を成すピット群は、畠地として使用されたもの他に、何らかの意図で穿たれたものと推察される。



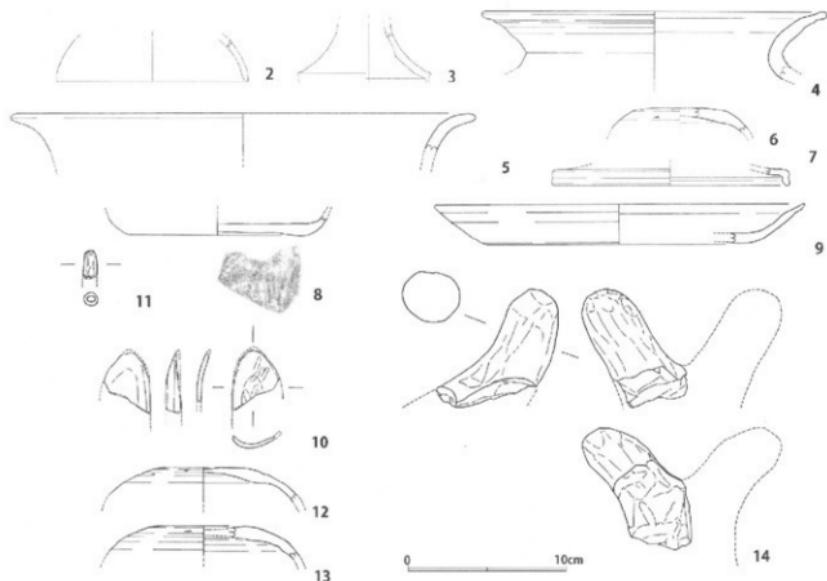
第7図 野塚遺跡調査成果図

調査終了後、確認のために調査地内の 2 か所で遺構面地山と思われる硬い褐色土層を切り崩して、更に約 50 cmほど深く掘り込んでみたが、土砂の色が褐色からやや明るい褐色土に変化していくものの、硬い均一な地層のままで人為的な痕跡は確認できなかった。

遺物は、遺構面を覆う火山灰土中から土師質の土器片と思われる細片が数十片検出さ

れた他に、土錐 1 個(第 8 図 11)、須恵器高杯の脚片が 1 個(第 8 図 3)検出された。また、いくつかのピット内には土師器の細片が検出されたが、どういう形状の器なのか類推できるような大きな破片は検出されていない。ただ、須恵器壺蓋片と思われる破片がピットの底で検出したものが 1 点ある。また、上面から土製支脚片(第 8 図 14)が出土したピット(P-5)もあった。

2 は壺蓋片で、P-12 の途中の壁面に貼りついていた小片である。単純な口縁部をもち器径は推定で 12 cm ほどのものか。高杯片(3)は、黒褐色の表土中から出土したもの。脚部の破片で脚径は推定 8.2 cm を図る。この破片には透かしの痕跡が無いので、二方向に透かしのある、やや器高の低い高杯ではないかと思われる。4 は P-3 内の埋土中にあった須恵器甕片で推定口径 21.4 cm を測るもの。5 は P-4 内の埋土中で検出された土師質の甕片と思われる。口径推定 28.4 cm を測る。6・7・10 は P-5 内で検出したもの。6・7 は須恵器片、10 は土師である。8・9 は P-6 の壁に貼り付いていたもの。8 は土師質の皿で底部外面に糸切り痕が残っている。9 は須恵質の蓋片である。P-5 の上面で検出されている土師質の把手は、径 3 cm、長さ 8 cm ほどのもの。12・13 は須恵器壺蓋片である。いずれも 6 世紀末以降のものではないかと推察している。



第 8 図 野塚遺跡出土遺物実測図

4. まとめ

今回の調査地である八東町江島は、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』では「蜈蚣(ムカデ)島」と記載され、「東の邊に神社あり。この外はことごとに民の家なり。土ゆたかに沃(こ)え、草木茂り、桑麻豊かなり」と記載されているように、民家がたくさん立ち並んで、極めて豊かな島であった。

平成 19 年の試掘調査と同年の鉄塔基部の発掘調査では、いずれも柱穴状の断面をもつピット群が検出されている。今回も 20 数個のピットが検出され、土師器片や須恵器片の混入が認められるものも幾つかあった。

今回の調査でも、規則的に南北に並んでいるピット群を 2 か所で検出し、また溝状の遺構も検出することができた。このピットや溝状遺構内の埋土は、石などは混入していない単純均一な土砂なので、役所跡のような大きな建物の柱跡とは考え難いが、前述した出雲国風土記に記載されている「民の家」に相当する一部を検出したものではないかと考えている。

また、周辺の畠にも多くの土師器や須恵器片が散布しているのが認められるので、遺跡は全島に広がっているものと推察されるのである。

出雲国風土記に記載された古い歴史を持つ島であり、今後も、こうした機会に発掘調査の実績を積み重ねることによって、江島の各時代の状況が次第に明らかになっていくものと期待している。

【参考文献】

1. 加藤義成「校本出雲国風土記」1968 年
 2. 実道正年「島根県の縄文式土器集成 I」1974 年
 3. 「八東村誌-科学的村誌えの試み」山本清他 1956 年
 4. 「八東郡誌」1973 年
 5. 「八東町江島の地形と奈良時代の遺跡の発掘調査」田中義昭他 1991 年
- 1991 年に行われた島根大学の調査では、7 世紀～9 世紀の集落跡の一部を確認したと結論付けている。また旧江島全島で 6 世紀～9 世紀の須恵器・土師器片を採集した。

図 版



枕木山から江島を望む(北から)



江島大橋から野塚遺跡を見る(西から)



調査前の状況(南から)



調査地近景(南から)



調査地近景(南から)



調査地近景(北から)



ピット群の検出状況(南から)



ピット群の検出(北から)



ピット群の調査(白線は平成19年調査トレンチ)



調査終了時の状況(南から)

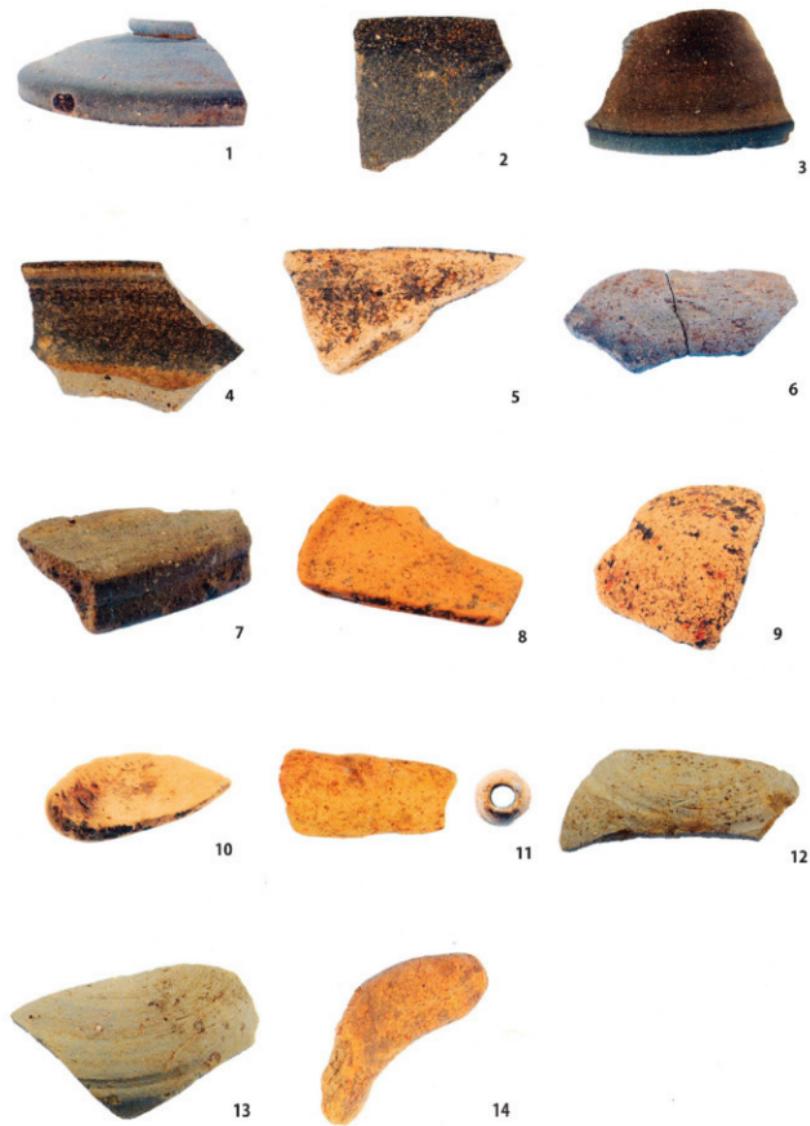


土製支脚

P-5(北から)



SD-01(東から)



報告書抄録

フリガナ	ノゾカイセキハツクツチヨウサホウコクシヨ							
書名	野塚遺跡発掘調査報告書							
副書名	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社八東野塚基盤新設工事に伴う							
卷次								
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第142集							
編集者名	中尾秀信							
編集機関	松江市教育委員会							
	財団法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	文化財課 〒690-0826 島根県松江市学園南1-17-24 環境センター2F TEL : 0852-55-5284							
	埋蔵文化財課 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1番地 TEL : 0852(85)9210							
発行年月日	2011年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野塚遺跡	島根県 松江市 八東町	32201	L-6	35° 30' 35"	133° 11' 28"	2010.4.13~ 2011.4.19	70m ²	無線基地局設置
所収遺跡名	各種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
野塚遺跡	散布地	古墳時代		柱穴 構造遺構		土師器・須恵器		

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国支社八束野塚基盤新設工事に伴う

野塚遺跡発掘調査報告書

2011年3月

発行 松江市教育委員会

財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷 松栄印刷有限会社

島根県松江市西川津町 667-1

